



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2016/04/03(日)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 178

第28回北海道高等学校バスケットボール新人大会 (男子)

(2月12日～14日 帯広市)

若山 茂樹

**男子は札幌日大の四年ぶり優勝。東海大四との決勝を制す。
札幌工業は旭川工業を振り切って3位となる。**

例年なら最も寒冷な時期である帯広市が、この大会の開催期間中気温が高く、最終日は終日大量の降雨となるコンディションの中での開催となった。新人チームのフレッシュさ、初々しさのなかで、これからの完成期をめざす多数の好ゲームが展開された。

ベスト4にはシードの四チーム、一部競り合いがあったものの順当に勝ち進み最終日を迎えた。

○準決勝の一つは、第一シードの札幌日大と第四シードの札幌工業の対戦。

高さに勝る日大がゲーム開始から一気にダッシュし、よく走りこむ。OFF・DEF共にリズムよく、6番のインターセプトの得点で札工たまらずにタイムアウト。札工も3ポイントが武器に対抗するが、落ち着いてゲームを展開する日大のリズムで1Pを終える。

2P、札工が何とかリズムを引き寄せようと、様ざまにトライするが、日大の走り込みが奏功する展開で、ペースは日大。ゲームは淡々と流れ、前半30点を越す日大リード。

3Pに入って、札工は必死に食い下がりを見せ3ポイントで対抗し20点台の得点差まで迫る。日大も運動量が少なくなり、やや詰められる場面もあったが、落ち着いて自分のペースを守る。

4Pに入り、日大は多くのメンバーをこまめに入れ替えるが、チームのリズムはガードの好リードによって保ったまま。札工は何とか詰めようと随所に光るプレーを見せるが、流れは変わらず、84対47で札幌日大が決勝進出。

○準決勝の二つ目は、第二シードの東海大四校と第三シードの旭川工業の対戦。

ゲーム序盤は良く動くDEFからの速い攻めが効果的に展開された旭工のリズム。旭工のDEFポジションの正確さと速さに手を焼いた東海だが、DEFの当たりを強くし4番の意地、17番のゴール下の頑張り、9番の3ポイントで旭工の勢いを交わすとやや旭工の運動量も低下し、一時東海がリードする。旭工も負けじとリズムをあげ旭工リードで1Pを終える。

2Pに入っても両チームの激しい主導権争いが続く。DEFでミスを誘い、走りきってリズムをつかむという、ともにあきらめたプレーのない好ゲームとなる。10点差ほどに旭工がリードすると、東海が17番を投入し一糸を報いるという展開。旭工は追いつかれそうになっては機先を制する展開で、6点差で前半を終える。48-42

3 Pも激しいリズムの奪い合いが始まるが、ミスを誘った東海のチャンスが得点につながり2分間で同点となる。冷静に相手を見る東海のリードガードがチームにリズムをもたらし、ドライブイン、3ポイントを連発し一気に10点ほどの差をつける。

4 Pに入り、旭工は何とかいいペースにしようと、やや無理な体勢からのシュートになる。東海はそのミスを確実に拾って走りこみ、差を広げる。残り8分から東海は旭工に24秒いっぱいを使わせる粘り強いディフェンスで走り通し、87-67で決勝進出。

○決勝は第一シード札幌日大と第二シード東海大四校の札幌決戦。

両チームともに、激しく厳しいあたりのマンツーマンではじまり、見ごたえのあるDEFのなか、攻撃の厚みのある日大が高さを生かして先行する。フリースローの確率もよく、いいリズムを保ち、運動量を高めルーズボールも良く拾い、巧にペースを握り1Pで33-12と突き放す。

2 Pに入り、東海はオールコートDEFと果敢な切込みで、じわじわと得点差をつめ12点差までせまるが、日大はじっくりとボールを運びペースを保つ。両チームのベンチとコートが一体となったDEFがゲームに緊迫感をあたえ、見ごたえのある展開となるも日大の16点リードで前半を折り返す。

3 Pに入っても激しいルーズボール争いが決勝戦にふさわしい緊迫感を与え、日大はわずかなチャンスを確実に得点に生かし引き離しにかかるが、東海もよく食いついてくる。4番のミドルゾーンでの得点が効果的。

4 Pでも、東海の得点差をつめようと果敢な切り込みや、メンバーの入れ替えでゲームの流れをつかもうとする頑張りではあるが、日大の落ち着いたゲームの展開からの3ポイントなどが有効に決まり、残り3分で25点差となりゲームが決まった。日大は、最後まで要所のスピードが落ちず93-62で優勝を飾った。

ベスト4には、リズムが苦しいときにDEFでよく動き、走ることを怠らないという、基本に忠実な好感もてるチームがそろった。結果的に成功し逆転したり、突き放したりという結果はともなうが、そうした結果にならずとも、観衆の手に汗を握らせ、応援者に満足感を持たせてくれる、指導者の選手掌握力と選手自身の頑張りは、新人チームであるからこそ、半年後の高体連に向けて楽しみが満々のゲームであったと感じる。札幌日大は、そうしたベンチとコートの信頼感にもとづく「あ・うん」の呼吸がより長じていたと強く印象づけられた。札幌日大を軸とした、今後のチャンピオン争いが大変楽しみである。

1年生のみで健闘した白樺学園やベスト4レベルで札幌日大と戦った駒大苫小牧など、注目されるチームはたくさんあるので、各チームのなお一層の努力を期待したい。